

陳啓源『毛詩稽古編』における詩序論について

江尻徹誠

はじめに

陳啓源(字、長發。？～一六八九)は、明末清初と呼ばれる明朝と清朝の過渡期に活躍した學者である。詳細な傳記資料は残されていないが、『清史列傳』によれば、經學、とりわけ『詩經』に深い造詣を示した人物と伝えられ、著作に『詩經』の研究書として康熙二十六年(一六八七)に完成した『毛詩稽古編』三十卷が現存する¹⁾。

『毛詩稽古編』は、陳啓源の在世時、ほとんど流布することがなかったが、江西按察使である王昶(一七二四～一八〇六)の進呈により、乾隆四十六年(一七八一)に完成した『四庫全書』に収録された後、嘉慶十八年(一八一三)に初めて上梓され、道光九年(一八二九)には『皇清經解』に収録された。

乾隆年間以降の、同書に對する反應および評價については、たとえば阮元(一七六四～一八四九)が嘉慶十八年刊本に寄せた序文に

近世の學者、此の書を知らず。惟だ惠定宇徵君、亟々之を稱し、是に於いて海内好學の士、始めて知りて轉抄し藏奔す。

と述べていることが参考となる。阮元によれば、惠棟(一六九七～一

七五八)の賞贊を契機として、『毛詩稽古編』は世人に知られるようになったという。やがて『毛詩稽古編』が刊刻されると、阮元の他、李富孫(一七六四～一八四三)や胡承瑛(一七七六～一八三二)等々、幾多の學者が『毛詩稽古編』に序文や跋文を寄せたのであるが、これらの點から、陳啓源ならびに『毛詩稽古編』が、清朝の乾隆・嘉慶年間(一七三六～一八二〇)、いわゆる乾嘉期以降の學界において注目される存在であったことがうかがえる。

『毛詩稽古編』がこのように注目されるようになった一因については、以前、拙稿「陳啓源『毛詩稽古編』—『詩經』解釋の方法と後世の評價について—」(『中國哲學』第二十九號、北海道中國哲學會、二〇〇〇年十二月)において考察を加えた。その結果、『毛詩稽古編』において用いられていた陳啓源の實證的な學問手法が、乾嘉期の學風と合致したため肯定的に受容されたことが確認できた。その他、陳啓源に關する專著としては郭明華氏、および林葉連氏による研究が發表されている²⁾。とはいえ、それらを總じて陳啓源の『詩經』に關する學說とその學術的價值をすべて検討・確認しえた譯ではなく、新たな角度から検討する餘地も遺されている。

そのひとつとして、陳啓源の詩序に對する考え方、換言すれば、詩序論が擧げられる。詩序は、詩經學における重要な命題であり、たとえば皮錫瑞（一八四九〜一九〇八）の著作『經學通論』によると、詩序は、『詩經』を離解たらしめるものであり、古來からその是非が議論されてきたという。そこで、『毛詩稽古編』を紐解いてみると「小序無くば則ち詩讀むべからず」（卷二十五「總詁、舉要、小序」）のように敘述されていることから、陳啓源が詩序、とりわけ各々の詩の冒頭に附された小序の必要性に注目していたことがわかるが、陳啓源は、果たしていかなる背景のもと、いかなる根據から、詩序を尊重する立場を表明したのであろうか。

そこで本稿では、陳啓源が詩序を重要視した要因について検討を加えることによって、陳啓源の詩序論とその特徴を明らかにし、陳啓源の詩經學を説明する一助としたい。その上で、陳啓源の詩序論が、清代詩經學史においてどのように位置づけられるのかについても論及し、陳啓源の詩經學がいかなる時代的價值を持ち得ていたのかについても觸れてみたい。

なお、上述のとおり、『毛詩稽古編』には、『四庫全書』所收本、嘉慶十八年刊本、『皇清經解』所收本等の版本があり、そのいずれも現存するが、本稿では假に、現存する最古のテキストと考えられる『四庫全書』所收本を底本とする。また、小論において『毛詩稽古編』を引用する際には書名を省略し、卷數および篇名のみを明示するとともに、その原文を注に附記する。

一、詩序重視の要因

まず論の端緒として、陳啓源が『毛詩稽古編』において、詩序をい

かなる資料として把握し、詩序にいかなる意義を見出しているのか、考察してみたい。

陳啓源は、歐陽脩（一〇〇七〜一〇七二）が『詩本義』卷一「麟之趾」において、詩序と孟子について論じた一節を引用して、次のように述べている。

歐陽永叔言ふ、「孟子、詩の世を去ること近くして最も善く詩を言ひ、其の説く所の詩義と今の序意とを推すに、多くは同じ」と。斯の言、信なり。（卷二十五「總詁、舉要、小序」）

歐陽脩は、孟子による詩の解釋と、詩序による解釋とを比較・検討したところ、それらの多くが内容的に合致しているとの見解を示したが、陳啓源もこれを肯定するのである。

さらに陳啓源は、孟子の學說と詩序との關係について、孟子が提唱する讀詩法を擧げ、次のように檢證を進める。

源、因りて諸を孟子の論ずる所の讀詩の法に考ふるに、其の要は二端に外ならず。一に曰く、「其の詩を誦するに其の人を知らざるは、可ならんや。是を以て其の世を論ず」と。一に曰く、「詩を説く者は、文を以て辭を害はず、辭を以て志を害はず」と。然らば則ち詩を學ぶ者は、必ず先づ詩人の、何れの時に生き、何れの君に事へ、且つ何れの事に感じて詩を作れるかを知り、然る後、其の詩、讀むべきなり。誠に此くの如からんことを欲すれば、小序を含きて、奚に由りて入らんや。（同右）

文中、陳啓源は、孟子の擧げた二點の讀詩の方法を紹介し、その上で、詩が詠まれた當時の状況や社會情勢を熟知し、詩を詠んだ者がその詩にこめた眞意や主張を理解して初めて『詩經』解釋は可能となる、詩序はそのためにも不可缺の存在である、と主張しているのである。

續いて陳啓源は、孟子による讀詩法が詩序の媒介を必要とする根據について、次のように述べている。

夫れ世を論じて方めて詩を誦すべきも、詩自ら其の世を著さず。志を得て方めて詩を説くべきも、詩又自ら其の志を白さず。後の詩を學ぶ者をして、何にか自りて入らしむる。古の國史の官、早に慮ること此に及ぶ。故に詩に載せざる所の者は、則ち之を序に載す。……故に詩、必ず以て序を無みすべからざる有るなり。序を合きて詩を言ふは、此れ孟子の所謂、志を害ふ者なり。(同右)

ここで陳啓源は、孟子の讀詩法を、「世」と「志」という言葉に集約した上で、詩序の由來についての持論を展開する。『詩經』にみえる詩そのものは、時代背景である「世」と、詩人の眞意である「志」を明確には表現していないために、『詩經』の解釋は困難を極める。ところが、『詩經』の詩が採集された當時、歴史編纂官である國史が、そのことにいち早く氣づいていた。そこで國史は、詩に明確には表現されていない寓意や時代背景、詩人の眞意などを文章として記録したのであり、原初の詩序はこの國史の記録に由來するものである、と陳啓源は推察する。

つまり、詩序はその淵源に、「世」と「志」を内包している文章であり、そうであるからこそ、『詩經』解釋には不可欠の資料である、と陳啓源は認知していたこととなる。

原初の詩序は國史に端を發する、という陳啓源の見解がここに明らかになったが、今日我々が目にするのできる詩序は、どのような過程を経て成立したと陳啓源は理解していたのであろうか。この點に關しては、陳啓源の「詩序は傳はること子夏の徒よりし、師授歴たり」(卷十七、大雅「大明」という敘述が參考となる。子夏は孔子の

高弟であり、しばしば『詩經』の成立と關連づけて語られるが、その子夏や子夏の弟子達の手を経て詩序が傳承した、と陳啓源は推察しているのである。

ただし陳啓源は、子夏については「序、縦ひ子夏の作に非ざるも、然れども其の來ること古し」(卷十六、小雅「都人士」との見解も示している。詩序が子夏の徒によって傳承されたことは間違いないにしても、その作者が子夏に限定されないこと、および詩序の淵源は子夏よりさらに遡及する可能性があることを主張しているのである。

如上の考察により、陳啓源が詩序に依據するその主な要因を整理しえたが、ここで一例を舉げて、陳啓源の詩序論が『毛詩稽古編』においてどのように發揮されているのか、具體的に檢證したい。陳啓源は、鄭風「叔于田」および「大叔于田」を解釋して、次のように述べる。

兩叔于田、其の詞を玩するに、皆大叔を美す。而れども序に、「莊公を刺る」と云ふ。噫、此れ詩の序を無みす可からざるなり。段の美せらるるは、飲酒のみ、搏獸のみ、射御・足力のみ。之を美して乃ち以て之を譏るなり。然れども段の此を以て能と爲すは、莊公の過なり。左氏の所謂、教を失ふを譏るなり。序、微かりせば、則ち詩の志は、將に詞を以て害はれんとす。(卷五、鄭風「叔于田」)

當該の兩詩は、鄭の莊公の弟である大叔段を詠った詩である。兩詩の一節に、たとえば「叔に如かざるなり、洵に美しく且つ好し」(「叔于田」)、「轡を執ること組むがごとく、兩驂は舞ふがごとし」(「大叔于田」)とあるように、兩詩は大叔段の容姿や武藝を稱讚する詩と解しうる。ところが陳啓源はここで、兩詩の詩序の記述「莊公を刺る」が、『春秋左氏傳』にみえる莊公と段の係争にまつわる記述と合致す

ることに着目する。そこから、段が内面の徳ではなく、表面的な技藝ばかりを稱讃されていることはつまり、段の人間性に對する非難の裏返しであり、また、段をたとえ表面的にとはいえ稱讃することにより、その兄でありながら段を教化することができなかった莊公を批判する詩であると解釋する。その上で陳啓源は、詩序が無ければ、詩は表面的な解釋しかおこなわれず、その眞意が損なわれてしまうため、『詩經』を讀解するには、詩の「世」と「志」を含有する文章である詩序が不可缺である、と結論づけているのである。

一、詩序の起源に關する議論

陳啓源は詩序を尊重する理由のひとつとして、詩序の由來が詩を採集した當時に遡ることを擧げていた。『詩經』解釋に詩序を用いることの是非は、その資料としての出自や信頼性を根據に判斷できるからである。

しかし、詩序の起源・出處やその作者の論定に關しては、古來から諸説紛糾しており、未だ定説をみないのが現状である。それゆえに、個人の主張や時代の思潮によって、詩序そのものの評價に大きな差異が生じていたことは想像に難くない。

そこで本節では、陳啓源の活躍時期である明末清初に至るまでの、詩序の起源に關する學說の推移とそれに附隨する問題について整理し、陳啓源の在世時に詩序が置かれていた立場を明らかにすることによって、陳啓源の詩序論が持つ時代的意義の解明、およびその清代詩經學史上の位置づけを試みるための一助としたい。

陳啓源が前節にて自説の根據としたように、孔子や子夏といった古代の聖賢の手を経て詩序が成立したとする傳統的な學說がある。その

一例として南北朝時代の沈重（五〇〇〜五八三）の言を挙げたい。

沈重云ふ、「鄭詩譜の意を案ずるに、大序は是れ子夏の作、小序は是れ子夏・毛公の合作なり。卜商、意盡くさざる有り、毛、更に足して之を成す」と。（『經典釋文』毛詩音義上「周南關雎」所引）

ここでは、詩序は子夏と毛公に由來するものであるという考えが述べられている。また、沈重の頃からやや下った唐代になると、欽定の經書解釋書として『五經正義』が編纂されたが、そのひとつである『毛詩正義』は、詩序を内包するものであった。ここから當時、詩序が重用されていたことがうかがえるであろう。

他方、詩序はそれら聖賢よりも後代の學者の手によるものとする學說がある。『後漢書』衛宏傳に、

初め、九江の謝曼卿、毛詩を善くし、乃ち其の訓を爲す。宏、曼卿に従ひ學を受け、因りて毛詩序を作り、善く風雅の旨を得、今に于て世に傳はる。

とある記述にもとづき、詩序は後漢の學者、衛宏の作とする學說である（以下、「衛宏作成詩序」説と表記する）。この記載が事實であるならば、詩序はその古典性を喪失し、その資料價值にも疑問が生ずることとなるであろう。

この「衛宏作成詩序」説について、南宋の鄭樵（字、漁仲。一一〇二〜一一六〇）は、「詩序辨」において是認した上で、さらに詩序の作者に關して次のような考證を加えている。

小序は衛宏に作らると謂ふは、是なり。……而して題下の序は、則ち衛宏、謝曼卿に従ひ、師説を受けて之を爲すなり。案ずるに後漢儒林傳に、「衛宏、字は敬仲、謝曼卿に従ひ毛詩を學び、因

りて毛詩序を作り、善く風雅の旨を得、今に於いて世に傳はる」と云ふ。……惟ふに宏序、東漢に作らる。故に漢世の文字、未だ詩序を引く者有らず。惟だ黃初四年、「曹共公、君子を遠ざけ小人を近づく」の語有り。蓋し魏は漢より後。而して宏の序、是に至りて始めて行はるるなり。〔六經奥論〕「詩序辨」

文中、二點の根據を擧げて、詩序の作者が衛宏であることを述べている。漢代の文獻に詩序の引用がみられないこと、および詩序の引用の端緒として、曹風「候人」の小序が、魏の黃初四年（二三）の詔の中に「共公、君子を遠ざけ小人を近づく」として用いられていることである。

要するに、詩序は衛宏の作とする『後漢書』の記述に考證を加えて、衛宏が詩序を作成したと考えられる後漢の前後に、詩序の引用の有無が整合的に確認できることを根據として、衛宏を詩序の作者と認めているのである。

鄭樵の、右のような學說の影響を受けた學者としては、南宋の朱熹（一一三〇～一二〇〇）が擧げられる。朱熹は、鄭樵の影響を受けて詩序そのものに疑問を持つに至ったことを次のように述べる。

詩序は實に信するに足らず。向に鄭漁仲に詩辨妄有り、力めて詩序を詆り、其の間の言語太甚だしく、以て皆是れ村野妄人の作る所と爲すを見る。始め亦之を疑ふも、後來、子細に一兩篇を看、因りて之を史記・國語に質し、然る後、詩序の果して信するに足らざるを知る。〔朱子語類〕卷八十、詩一「綱領」第四十條

朱熹は、鄭樵『詩辨妄』にみえる詩序に對する激しい排撃に半信半疑であった。しかし、のちに自ら檢證した結果、詩序の資料的價値に疑念を抱くようになったというのである。やがて朱熹は『詩集傳』を

著し、そこでは詩序を掲げない『詩經』解釋を試みる。次いで『詩序辨說』では詩序に對する批判をまとめ、『詩經』解釋から詩序を排斥することを繰返し主張するのであるが、果たして朱熹はどのような考えによって詩序を退けたのであろうか。

そこで、朱熹が詩序を否定するに至った要因について、その著作から検討してみたい。朱熹は、『詩序辨說』の序文において次のようにいう。

詩序の作は、說者同じからず。……唯だ後漢書儒林傳、以て衛宏毛詩序を作り、今、世に傳はると爲す。則ち序は乃ち宏の作なること明らかなり。

ここで朱熹は、『後漢書』の記述に依據し、詩序が衛宏の手に成ることを斷じている。さらに朱熹は、「某、又看得するも亦是れ衛宏一手の作ならず、多くは是れ兩三手合して一序を成す」〔朱子語類〕卷八十、詩一「綱領」第三十六條、「某の詩傳、小序を去るは、以爲へらく此れ漢儒の作る所なればなり」〔朱子語類〕卷二十三、論語五、爲政篇上「詩三百章」第七條」と述べている。つまり朱熹は『後漢書』の記述を篤信した上で、詩序が漢儒すなわち衛宏とその徒の手によるものであり、資料としての信頼性に疑念の残るものであることを理由として、自らの著作『詩集傳』から詩序を排除したのである。

これらの點から推察するに、朱熹が「衛宏作成詩序」説を切っ掛けとして、詩序に對する批判的な觀點を持って『詩經』を讀解することにより、詩序の資料的價値を否定するに至ったことは明らかである。

朱熹『詩集傳』は、詩序を含む『毛詩正義』が古注と呼稱されるのに對し、新注と呼稱されるようになる。この新注は「是れより以後、詩を説く者は、遂に攻序・宗序の兩家に分かれ、角立し相爭ふ」〔四

庫全書總目提要』經部詩類一「詩集傳」という状況を引き起こし、以降、詩序の存廢が詩經學のひとつの論題として議論されることとなったのである。

元代に入ると、朱子學は皇慶二年（一二三三）に、朝廷における官史登用の規範學問、いわゆる官學に定められた。こうして、『詩經』を學ぶ者にとって、新注は大きな影響力を有するようになるが、元代には依然として詩序を含んだ古注も兼用されていた。

しかし明代には「詩は朱子集傳を主とす。……永樂の間、四書五經大全を頒き、註疏を廢して用ひず」（『明史』「選舉志」）とあるように、永樂十三年（一四一五）に、朱子學系の解釋をその骨子とする『四書五經大全』が編纂された。『詩經』については『詩傳大全』が編まれて、古注は科擧から撤廢されることとなった。そして續く清朝は明朝の制度を基本的に引き繼いだため、詩經學における新注の權威も保持されることとなった。

このような経緯から、元代以降、少なくとも科擧を志す知識人の間では、古注に依らず新注に依る『詩經』解釋は周知のことであったと考えられる。

また、科擧の基準解釋としての『詩集傳』および『詩傳大全』の通行に伴い、朱熹が詩序を否定する契機となった「衛宏作成詩序」説の存在も、知識人達に認知されていたものと推察される。明末清初における「衛宏作成詩序」説の認知の実態について幾つか具體例を挙げるならば、たとえば、陳啓源とはぼ同時代の學者であり、博學で知られる顧炎武（一六一三〜一六八二）が、「衛宏作成詩序」説に觸れて、次のように述べている。

漢人、自作の書を以てして托して古人と爲すを好む。張霸の百一

尚書、衛宏の詩序の類、是れなり。（『日知錄』卷十八「竊書」）
顧炎武は、衛宏が詩序を作り、古代の聖賢に假託したと考えている。顧炎武が「衛宏作成詩序」説を肯定的に受容した上で詩序を取り扱っていたことが、ここから看取できる。

また、『尚書』研究で著名な閻若璩（一六三六〜一七〇四）も、『古文尚書』に關する考證を試みた際に、次のように「衛宏作成詩序」説に言及している。

今、安國、魯を舍きて毛に従ふは、其れ家法に循はざる者か、抑魏晉の間、魯詩已にきやく微となりて、毛詩方めて大いに世に顯はれ、遂に此れより出づるを覺えざるか。葉夢得「漢代の文章、詩序を引くこと無し。惟だ黃初四年『共公、君子を遠ざけ小人を近づく』の説有り。蓋し魏は漢より後る。衛宏の詩序、是に至りて始めて行はる」と謂ふ。此れも亦一の切證と云ふ。（『尚書古文疏證』卷二、第二十二）

ここで閻若璩は、尚書に關する持論を立證する根據として「衛宏作成詩序」説を提示している。若干の説明を補足すると、文中の孔安國は、詩經學に關しては魯詩の流れを汲む學者といえる。ところが、その孔安國が注を附したといわれる『古文尚書』においては、本来なら魯詩に依って『詩經』を解釋すべきところを、魯詩より後世の學派にあたる毛詩に依っているのである。閻若璩はこの矛盾點を指摘した上で『古文尚書』が後世の偽作であることを論じた譯であるが、その根據として、毛詩が流行したのは魏晉に入ってからのことである點と、衛宏が毛詩序を作り、その影響が三國時代、魏の頃から、典籍に引用される形で見られるようになった點を挙げている。ここから、閻若璩が「衛宏作成詩序」説を、自説の根據として肯定的に受容していたこ

とは明らかである。^⑧

ちなみに、後ほど検討を加えるが、閻若璩が引用している學説は、先掲の「詩序辨」において「衛宏作成詩序」説の是非を考證する際に用いられていたものである。ここにいう葉夢得(號、石林。一〇七七〜一一四八)は、鄭樵に先んずる宋代の學者であり、實はこの説は葉夢得に端を發するものである。^⑨

如上の考察から、宋代以降、葉夢得や鄭樵、朱熹らが「衛宏作成詩序」説を認知した上で、それをひとつの契機として詩序の資料的價值を否定したこと、朱熹『詩集傳』の流布により、詩序の存廢が議論されるようになったこと、元代に朱子學が官學となり、明代には詩序を含む古注が科擧から撤廢されたことに加えて、明末清初の學界において「衛宏作成詩序」説が肯定的に受容されていた事例が確認できた。

二、詩序の由來に關する考證

「衛宏作成詩序」説が、明末清初の學界において周知の學説であったことは、前節の考察から推測できる。そのような時代背景のもとで、陳啓源が、詩序は採詩の當時に淵源を持つ由來の古きものである、と主張し、頑なに詩序を擁護したのは、いかなる知見によるものであるうか。

そこで本節では、陳啓源がどのような妥當性を確認した上で詩序に依據していたのか、その要因について検討を加えることにより、陳啓源の詩序論が有する特色を、より一層明らかにしてみたい。

まず手始めに、次の一文を提示したい。陳啓源は、小序の成立および傳授に關する自身の見解を、以下のように述べている。

小序、傳はること漢初自りし、其の後序、或いは後儒の増益に出

陳啓源『毛詩稽古編』における詩序論について

づるも、首序に至りては則ち采風の時、已に之有り。由りて來たること古し。其の、某詩を指し、某君の事、某人の作と爲すは、皆師說相傳ふること此くの如し。臆說に非ざるなり。(卷二十五「總話、擧要、小序」)

この敘述で留意したいのは、冒頭、陳啓源が小序の傳承を、少なくとも漢初の頃からであると斷じている點である。また、陳啓源は小序について、その首句を「首序」、以降を「後序」と呼稱した上で、「後序」に關しては、漢代以降の學者に依る改竄の可能性を否定していない。しかしながら、小序の根底部分である「首序」は、國史の官が詩を採集した際には存在していたと、陳啓源は主張している譯である。

漢初の時點における小序の傳授について、陳啓源は確信をもっていうようである。その根據に關して、陳啓源は『毛詩稽古編』において、次のような考證を示している。

王伯厚困學紀聞、葉氏(葉夢得)の語を引きて謂ふ、「漢世の文章は、詩序を引く者無し。魏黃初四年の詔に『曹風、君子を遠ざけ小人を近づくるを刺る』と云へば、蓋し毛詩序、此に至りて始めて行はる」と。案ずるに葉語は是に非ず。司馬相如の難蜀父老に「王事未だ憂勤に始まり、而して逸樂に終はらずんばあらず」と云ふは、此れ魚麗の序なり。班固の東京賦に「德廣の被むる所」と云ふは、此れ漢廣の序及び鼓鐘の毛傳なり。一は武帝の時に當たり、一は明帝の時に當たる。皆、序の語を用ふ。漢世に非ずと謂ふべけんや。(卷九、小雅「魚麗」)

陳啓源は、南宋の王應麟(字、伯厚。一二三三〜一二九六)の著作『困學紀聞』にみえる、葉夢得の詩序に關する所論を採り上げ、その上で新たな例を提示して考證を試みている。ここにみえる葉夢得の所

論は、本稿第二節にて擧げた、「衛宏作成詩序」説の考證における論據となつた學説である。陳啓源は、漢代の文章にみえる詩序の引用例を擧げることにより、葉夢得の主張、換言すれば「衛宏作成詩序」説そのものに、疑義を呈したのである。

具體的に述べると、まず葉夢得は、漢代の文獻資料に詩序を引用する例がみられないことと、衛宏が『毛詩』の學を學んだと推測される時期以後に詩序の引用例がみられることを論據として、『後漢書』の記述を肯定し、詩序は衛宏によつて作成され、その後引用されたことを考證している。これに對して陳啓源は、小雅「魚麗」の小序「憂勤に始まり逸樂に終はる」が、前漢の司馬相如「難蜀父老」にみえることと、周南「漢廣」の小序「漢廣は、德廣の及ぶ所なり」が、後漢の班固「東都賦」にみえることを反證として、「衛宏作成詩序」説の論據を否定し、葉夢得の考證による詩序の成立時期の特定が認められないことを主張しているのである。

つまり、葉夢得が、詩序はその成立後に諸文獻に引用される、とする觀點から、詩序の引用の時間的前後關係に着目して考證を試み、衛宏を詩序の作者と比定していたのに對し、陳啓源が、衛宏の在世以前に詩序の引用例が確認できることを考證したため、葉夢得の學説がここに覆されることとなつた譯である。

しかし、「衛宏作成詩序」説を顧みるに、『後漢書』衛宏傳に明確な記述が存することから、衛宏が、先行する諸文獻から材料を採集して詩序を作成した、と考へる點については否定することができない。そこで、この問題に關する陳啓源の見解を考察すべく、次の一文を提示したい。陳啓源は、詩序が、各々の詩の冒頭に附記されていることと觸れて、以下のような詩序論を述べている。

詩序、本は自ら一編を爲す。毛公分ちて篇首に實くは、本より讀むに便あらんことを欲するのみ。他意無きなり。……源謂へらく、序は注に非ず。此れ自ら宜しく經の前に實くべし。注は文に順ひ義を釋するのみ。未だ其の文を讀まざれば、庸て其の義を尋ぬる無きなり。序の指す所の若き者は、乃ち作詩の世と其人、之を作るに及ぶの故と、苟しくも未だ此れに明らかならざれば、之を誦して篇を終ふと雖も、茫として言ふ所は何の事なるか、之を言ふ者は何の意なるかを知らざるなり。惟ふに序を得て始めて曉然たり。故に之を篇首に實き、讀者をして先づ焉を觀しむれば、則ち經に於いては入り易し。(卷二十五「總話、舉要、小序」)

ここで陳啓源は、詩序が元來一編の書物であつたことと、『詩經』毛傳を著した毛公が、詩序を『詩經』解釋の便宜のために分割し、詩の冒頭に附記したことを主張している。これは鄭玄の「毛公、詁訓傳を爲るに至り、乃ち衆篇の義を分かち、各々其の篇端に置くと云ふ」(小雅「南陔」小序「有其義而亡其辭」鄭注)という言にもとづくものである。つまり陳啓源は、『後漢書』の「衛宏作成詩序」説に依據せず、この鄭玄による記述に依據することによつて、詩序が毛公よりも前代から存在していたことを斷じているのである。

如上の整理を通して、陳啓源が、詩序の根源は毛公以前に由來するという學説を鄭玄から踏襲していた點と、小序の引用と考へられる文獻資料が、前漢の時期まで遡つて存在することから、葉夢得の學説に疑義を呈し、小序の由來は遅くとも前漢以前に位置づけられると考證していた點が明らかとなつた。

この考證を前提條件として組み立てられた陳啓源の詩序論は、「衛宏作成詩序」説の論據を否定するものである。それはつまり、陳啓源

の詩序論が、宋代以降議論され續けた詩序にまつわる論争に、ひとつの終着點を導き出しうるといふことである。

要するに陳啓源は、一連の考證學的的手法による論究と併せて『後漢書』の記述に依據せず鄭玄の言を篤信することによって、衛宏のもとから詩序を解放し、詩序の詩經學における資料價值を、明末清初の學界に再確認したのである。これこそが陳啓源の詩序論における最大の特質といえるであらう。

おわりに

本稿では、陳啓源がその著作『毛詩稽古編』において主張した詩序論について検討を加え、その特色について考察を試みた。結果として、陳啓源が『詩經』解釋において詩序を重要視した根據と、詩序の由來に關する幾つかの特徵的な學說が存することが明らかとなった。

まず、陳啓源が詩序に見出した意義について検討を試みた。そこから陳啓源が、詩にまつわる様々な状況や社會情勢を明白にし、詩にこめられた詩人の眞意や主張を正確に讀み解いてこそ『詩經』は解釋しうる、という孟子の讀詩法に賛同したこと、それに加えて陳啓源が、この孟子の主張を「世」および「志」という表現に凝縮し、自身の『詩經』解釋における規範としたことが明らかとなった。

また陳啓源は、詩序が國史の當時に由來し、子夏の門弟達の手を経て傳承したと推察し、そこから、詩序こそ詩の「世」と「志」をその淵源に含有する、『詩經』解釋に不可欠な資料であると認知し、詩序を用いた『詩經』解釋を實踐していたことが確認できた。

續いて、陳啓源の在世時に、その詩序論が置かれた立場を説明すべく、清初までにみえる詩序の起源に關する諸學說について整理を施し

た。その結果、まず宋代、葉夢得や鄭樵らが、『後漢書』の記述に依據する「衛宏作成詩序」説を提唱したことにより、詩序の資料的價值を疑う動きがおこったこと、その後を受けた朱熹『詩集傳』の通行により、詩序の存廢に關する議論がおこなわれるようになったことが確認できた。さらに明代には官學としての詩經學から詩序が撤廢され、清初には顧炎武や閻若璩のような知識人達が「衛宏作成詩序」説を受容し肯定していたことも確認できた。

このような背景下において、なお陳啓源が詩序に依據した要因に關し、さらなる考察を試みたところ、陳啓源が、『後漢書』の「衛宏作成詩序」説を裏づける葉夢得の考證に對して、前漢の文獻資料にまで遡って小序の引用が確認できることを反證として、詩序を衛宏の作とみなすことに疑義を呈していたことが明らかとなった。葉夢得の「衛宏作成詩序」説は、詩序成立の時間的前後關係に着目して、詩序が完成した後に諸文獻に引用される、と考える立場から、詩序の引用が衛宏以後からみられることを例證していたのであるが、この方法論が陳啓源によってここに否定されたことは、特筆すべきであらう。

しかし、「衛宏作成詩序」説について、『後漢書』衛宏傳に明確な記述が存在することを顧みるに、衛宏が諸文獻から材料を採集して詩序を作成した、と考える論法は否定できない。

この點に關しては、陳啓源が、鄭玄の言を採り上げ、それに依據することににより、詩序は毛公以前に端を發する、と斷じていることが確認できた。

要するに陳啓源は、『後漢書』ではなく鄭玄の言を篤信することに よって、衛宏を詩序の作者とは認めず、一連の考證の結果と併せて、詩序の詩經學における資料價值を明末清初の學界に再確認したのであ

る。これは陳啓源の詩序論における最大の特徴といえる。

如上の検討から、陳啓源が、清初に至る學界において周知の學説であつた「衛宏作成詩序」説に考證を試み、それを否定して採用しなかつたこと、それらの考證を踏まえた上で詩序を、古くは國史の官に由來する、詩の眞實や詳細を含有する文と推察し、自らの規範である孟子の讀詩法に則つた「詩經」解釋における必須の文として尊重したことが明らかとなつた。陳啓源の詩序論はかくして形成されたのである。

無論、詩序の存廢が議論され始めた宋代以降、陳啓源に先んじて、詩序による「詩經」解釋を試みた學者が存在しない譯ではない。だが、陳啓源が詩序を重要視するのは、自らの考證から導かれた詩序論がその裏づけとしてあつたからこそであり、この點において、陳啓源以前の、詩序を盲信する學者達とは一線を畫しているといえるのである。

この陳啓源の詩序に對する考究は、後代の學者からどのように評價されているのであろうか。この點に關しては、考證學者として名高い錢大昕（一七二八—一八〇四）の言を一例として提示しておきたい。

錢大昕は『十駕齋養新錄』において詩序の由來を論じているが、その際にまず「困學紀聞」にみえる葉夢得の論、つまりは「衛宏作成詩序」説の根據と、前節にて先掲の『毛詩稽古編』卷九、小雅「魚麗」にみえる陳啓源の所論を反證として引用している。

ここで錢大昕は「近儒陳啓源、始めて之を非として云ふ」（卷一「詩序」）と述べ、陳啓源が清朝乾嘉期に至る詩經學史上、初めて「衛宏作成詩序」説に對する反證を擧げたことを強調した上で「愚、謂へらく、宋儒は詩序を以て衛宏の作と爲す。故に葉石林に是の言有り。然れども司馬相如・班固、皆、宏の前に在り。則ち序の宏より出でざるは、已に疑義無し」（同右）と斷じ、「衛宏作成詩序」説が、陳啓源

による考證の結果、すでに論破されていることを明示している。これは錢大昕が陳啓源の考證を、詩序の由來に關する肯定的論證の端緒に位置づけ、評價したことに他ならない。つまり陳啓源の考證は、清初の當時のみならず、少なくとも乾嘉期までの詩經學史において、異彩を放つ學説であつたといえよう。

この點も併せて鑑みるに、陳啓源の詩序論は、清代の詩經學史上における實證的學問の先驅として、以降の詩序に依據する學説を導き出した、いわばひとつの轉換點として位置づけられるのではないだろうか。

注

(1) 陳啓源とその著作について、たとえば『清史列傳』には次のような記述がある。

陳啓源、字長發、江南吳江人。諸生。性嚴峻、不樂與外人接、惟嗜讀書。晚歲研精經學、尤深於詩。……所著毛詩稽古編三十卷……又著有尙書辨略二卷、讀書偶筆二卷、存耕堂稿四卷。（卷六十八、儒林傳下）

なお、文中の『尙書辨略』以下の著作は、現在傳わっていない。

(2) 當該の研究として、郭明華氏『毛詩稽古編研究』（東吳大學中國文學研究所碩士論文、一九九二年五月）、および林葉連氏『陳啓源胡承珙詩經之研究』（臺灣學生書局、一九九四年七月）を参照されたい。

(3) 皮錫瑞『經學通論』卷二、詩經、「論詩比他經尤難明其難明者有八」を参照されたい。

(4) 原文は次のとおりである。
無小序則詩不可讀。

(5) 清代における詩經學の趨勢については、戴維氏『詩經研究史』四七五

六〇六頁（湖南教育出版社、二〇〇一年九月）、および洪湛侯氏『詩經學史』四五七—六二二頁（中華書局、二〇〇二年五月）等を参照されたい。たとえば戴維氏は清代の詩經學を前期・中期・晩期の三期に分類しているが、要約するに、前期を「漢宋兼探期」、中期を「漢學大興・東漢古文復興期」、後期を「西漢三家今文學大興期」と規定している。洪湛侯氏もほぼ同様の内容で、清代詩經學を三期に分類しており、これらの分類に従うならば、陳啓源の活躍時期は清代前期となる。

(6) 原文は次のとおりである。

歐陽永叔言、「孟子去詩世近而最善言詩、推其所說詩義與今序意多同。斯言信矣。」

(7) 文中の引用部は『孟子』萬章下に、次のようにみえる。

孟子謂萬章曰、「一郷之善士、斯友一郷之善士。一國之善士、斯友一國之善士。天下之善士、斯友天下之善士。以友天下之善士爲未足、又尙論古之人、頌其詩、讀其書、不知其人可乎。是以論其世也。是尙友也。」

(8) 文中の「志」字は、諸版本では「意」字として表記されている。これは陳啓源が、父親の諱によって、文中の「志」字を、「意」字、あるいは「記」字に改めていることに起因するものである。なお、この點に關しては陳啓源の門人である趙嘉稷が『毛詩稽古編』の序文において説明を加えている。以下、本稿では、該當する「意」字を、「志」字に改める。

(9) 文中、引用部は『孟子』萬章上に、次のようにみえる。

故說詩者、不以文害辭、不以辭害志、以意逆志、是爲得之。如以辭而已矣。

(10) 原文は次のとおりである。

源、因考諸孟子所論讀詩之法、其要不外二端。一曰、「誦其詩不知其人可乎。是以論其世」。一曰、「說詩者不以文害辭、不以辭害志」。

陳啓源『毛詩稽古編』における詩序論について

然則學詩者、必先知詩人生何時、事何君、且感何事而作詩、然後、其詩可讀也。誠欲如此、舍小序、奚由入哉。

(11) 原文は次のとおりである。

夫論世方可誦詩、而詩不自著其世。得志方可說詩、而詩又不自白其志。使後之學詩者、何自而入乎。古國史之官、早慮及此。故詩所不載者、則載之於序。……故有詩必不可以無序也。舍序而言詩、此孟子所謂害志者也。

(12) 原文は次のとおりである。

詩序、傳自子夏之徒、師授歷歷。

(13) 原文は次のとおりである。

序縱非子夏作、然其來古矣。

(14) 原文は次のとおりである。

兩叔于田、玩其詞、皆美大叔。而序云「刺莊公」。噫此詩之不可無序也。段之美飲酒耳、搏獸耳、射御足力耳。美之乃以讖之也。然段之以此爲能、莊公之過也。左氏所謂讖失教也。微序則詩之志將以詞害矣。

(15) 鄭風「叔于田」および「大叔于田」の詩序は、それぞれ次のとおりである。

叔于田、刺莊公也。叔處于京、繕甲治兵、以出于田。國人說而歸之。
〔叔于田〕

大叔于田、刺莊公也。叔多才而好勇。不義而得衆也。〔大叔于田〕

鄭武公——莊公（鄭伯）

段（叔・大叔）

また、『春秋左氏傳』隱公元年にみえる記述は次のとおりである。

書曰、鄭伯克段于鄆。段不弟、故不言弟。如二君、故曰克。稱鄭伯、讖失教也。

つまり莊公と段の、兩者の争いにおいて、段ばかりではなく莊公にも非があつたことから、ここでは公という尊稱を用いられずに鄭伯と呼稱されておられ、そこから暗に莊公が批判されている、と解釋できる。陳啓源はまさにこの點が、詩序の記述「莊公を刺る」と整合すると考えたのである。

(17) 詩序の起源やその存廢に關する議論に關しては、先掲の戴維氏『詩經研究史』三二二―三七六頁(湖南教育出版社、二〇〇一年九月)、および洪瀛侯氏『詩經學史』一五六―一六三頁(中華書局、二〇〇二年五月)等を参照されたい。

(18) たとえば『四庫全書總目提要』經部詩類一「詩序」にみえる概括によると、孔子や子夏の他、毛公や國史の官などを詩序の作者と考ふる諸説が擧げられている。

(19) 『六經輿論』には偽託説があるが、この點に關しては、江口尙純氏『六經輿論』疑義(『中國古典研究』第三十六號、早稻田大學中國古典研究會、一九九一年十二月)の中で詳論されており、参照されたい。

(20) 曹風「候人」の小序は次のとおりである。
候人、刺近小人也。共公遠君子而好近小人焉。
また、『三國志』魏書、文帝不に、以下のようにある。

夏五月、有鵝鵠鳥集靈芝池、詔曰、「此詩人所謂汚澤也。曹詩」刺恭公遠君子而近小人、今豈有賢智之士處於下位乎。否則斯鳥何爲而至。其博舉天下僞德茂才、獨行君子、以答曹人之刺」。

(21) 鄭樵『詩辨妄』は佚書となつたが、顧頡剛氏による輯佚書『辨偽叢刊』(樸社、一九三三年七月)に所収されている。

(22) ただし、『詩集傳』には「故序、以此詩爲美武公、而今從之也」(卷二、衛風「淇澳」)のように、朱熹が詩序を排斥しながら、その解釋を支持する箇所も見受けられる。この點も含めた『詩集傳』にみえる朱熹の詩經學に關しては、友枝龍太郎氏「詩集傳をとおして見たる朱子の思想」

國風を中心として」(『朱子の思想形成』春秋社、一九六九年三月)および莫礪鋒氏「朱熹『詩集傳』與『毛詩』的初步比較」(『中國古典文學論叢』第二輯、人民文學出版社、一九八五年八月)等の研究がある。後者の莫礪鋒氏は當該論文にて、『詩集傳』にみえる朱熹の『詩經』解釋と詩序との關係について、朱熹が詩序の説を採用しているか否か、すべての詩篇を検討した上で、具體的に統計および圖示を施して考察を加えており、参照されたい。

(23) 朱熹による詩序批判の概要に關しては、林葉連氏『中國歷代詩經學』二八七―三二三頁(臺灣學生書局、一九九三年三月)および檀作文氏『朱熹詩經學研究』二二―四八頁(學苑出版社、二〇〇三年八月)に詳述されており、参照されたい。たとえば、後者の檀作文氏によれば、朱熹は「序無理」「斷章取義」「傳會歷史」の三つの觀點から批判を加え、詩序の學術的意義を否定するに至つた、と結論づけられている。

(24) 『元史』「選舉志」に、次のようにみえる。
經義一道、各治一經、詩以朱氏爲主、尙書以蔡氏爲主、周易以程氏・朱氏爲主。已上三經、兼用古註疏。

また、元代における朱熹の學說の受容については、先掲の戴維氏『詩經研究史』四〇―四二八頁(湖南教育出版社、二〇〇一年九月)等を参照されたい。

(25) 古注が科擧から撤廢されたことは、詩序の詩經學における意義に影響を及ぼしたと考えられるが、しかし詩序が全く用いられなくなつたという譯ではない。この點に關しては、劉毓慶氏『從經學到文學』(商務印書館、二〇〇一年六月)に論考があり、その上編二、2「尊序抑朱派の『詩經』研究」(同書七―八四頁)によると、宋代以降、明代中期になつて詩序を尊重する尊序派が復活し始めたとして、その例が擧げられている。また『詩經』を含む明代の經學については、林慶彰氏『明代考據學研究』(臺灣學生書局、一九八三年七月)および同書中に引用される諸

氏の研究があり、明代の科擧と經學の關係については、鶴成久章氏「明代科擧における專經について」(『日本中國學會報』第五十二集、日本中國學會、二〇〇〇年十月)がある。いずれも参照されたい。

(26) 『清史稿』「選舉志」に、次のようにみえる。

命仍舊例。首場四書三題、五經各四題、士子各占一經。四書主朱子集註、易主程傳、朱子本義、書主蔡傳、詩主朱子集傳、春秋主胡安國傳、禮記主陳澧集說。其後春秋不用胡傳、以左傳本事爲文、參用公羊、穀梁。

(27) 明代に編纂された『詩傳大全』は、『詩集傳』の冒頭に「詩序辨說」を附する體裁をとっている。また、清朝乾隆年間において『四庫全書』に所收された『詩傳大全』は通行本であったが、同様の體裁であることが實際に確認できる。そこから「衛宏作成詩序」説が、『詩傳大全』の讀者に認知されていることが推察できる。

(28) 文中に引用されている葉夢得の學説は、先掲の鄭樵による學説と同一の内容であり、詩序の由來を論じている。葉夢得と鄭樵の學説の關係についての詳細は注30を参照されたい。

(29) また、閻若璩はその著作『毛朱詩説』卷一、第二條において、詩序の全てが信用できるものではないことを論じている。

(30) 注19所掲の江口氏論文、六二頁を参照されたい。江口氏の考證に従うと、『毛詩集解』『文獻通考』などに引かれていた葉夢得の學説が、「詩序辨」にみえる詩序に關する考證を含む部分とはば一致すること、例證部分において『六經輿論』では葉夢得の學説の節略がみられること、王應麟『困學紀聞』に葉夢得の名で引用があることを根據とし、「詩序辨」にみえる詩序の由來に關する學説は葉夢得のものであるとする。

(31) 原文は次のとおりである。

小序、傳自漢初、其後序、或出後儒增益、至首序則采風時已有之。由來古矣。其指某詩、爲某君事某人作、皆師說相傳如此。非臆說也。

陳啓源『毛詩稽古編』における詩序論について

(32) 原文は次のとおりである。

王伯厚困學紀聞、引葉氏語謂、「漢世文章、無引詩序者。魏黃初四年詔云、『曹風刺遠君子近小人』、蓋毛詩序、至此始行」。案葉語非是。司馬相如難蜀父老云、「王事未有始於憂勤、而終於逸樂」、此魚麗序也。班固東京賦云、「德廣所被」、此漢廣序及鼓鐘毛傳也。一當武帝時、一當明帝時。皆用序語。可謂非漢世耶。

(33) 原文は次のとおりである。

詩序、本自爲一編。毛公分實編首、本欲便於讀耳。無他意也。……源謂序非注。此自宜實經前。注順文釋義而已。未讀其文、無庸尋其義也。若序所指者、乃作詩之世與其人及作之之故、苟未明乎此、雖誦之終篇、茫不知所言何事、言之者何意也。惟得序而始曉然矣。故實之篇首、俾讀者先觀焉、則於經易入。

(34) ここで陳啓源は毛亨と毛萇、いわゆる大小毛公を區別していない。なお、毛公という表記について、陳啓源は『毛詩稽古編』において四十四例、用いている。また、大小毛公を辨別しうる際にはそれを明記しており、實際には五例が確認できる。

(35) たとえば明代において、楊慎(一四八八—一五五九)や郝敬(一五五八—一六三九)が詩序を用いた『詩經』解釋を試みている。楊慎の經學については、注25所掲の林慶彰氏『明代考據學研究』三九—一三〇頁(臺灣學生書局、一九八三年七月)に、郝敬の經學については、井上進氏『漢學の成立』二四二—二五二頁(『東方學報』第六十一冊、京都大學人文科學研究所、一九八九年三月)に詳しい。また、郝敬の詩序論については、西口智也氏「郝敬の詩序論—朱子批判と孔孟尊重—」(『詩經研究』第二十三號、詩經學會、一九九九年二月)を参照されたい。

(36) 錢大昕に先んじて、「衛宏作成詩序」説に注目し、その是非に考證を施した學者は、管見の限り、陳啓源と惠棟の兩名のみである。惠棟は、『九經古義』卷六、「毛詩下」第五十四條において、陳啓源の學説には觸

れず、「衛宏作成詩序」説の論據を鄭樵の言とみなして考證を加えてい
る。一方、錢大昕は、小論にて先掲の『十駕齋養新錄』卷一、「詩序」
において、陳啓源と惠棟の學説をともに引用した上で、陳啓源の學説を
最も先行するものと斷じ、陳啓源と同様に、「衛宏作成詩序」説の論據
を葉夢得の言として考證を加えており、これらの點において惠棟と錢大
昕は見解を異にしている。また、錢大昕と同様に陳啓源の考證を採り上
げた學者としては、たとえば翁方綱（一七三三〜一八一八）が擧げられ
る。翁方綱はその著作『詩附記』卷一において、陳啓源の考證を議論の
端緒とし、錢大昕の考證を後詰めとして、詩序の起源は子夏に遡ると結
論づけている。